

令和6年度第2回江別市生涯活躍のまち整備事業地域再生協議会会議録（要点筆記）

日 時：令和7年2月14日（金）午前10時～午前11時10分

場 所：特別養護老人ホーム 日本介護江別1階会議室

出席委員：谷田川賢一委員、萩原克郎委員、新田雅子委員、菊地達夫委員、藤本直樹委員、小林徹男委員、田原久美子委員、岸本佳廣委員、森田弘之委員、佐々木尚弘委員、坂本憲昭委員、赤川和子委員（計12名）

欠席委員：三上真一郎委員、杉村勝彦委員（計2名）

事務局：伊藤企画政策部次長、嶋中政策推進課長、鈴木障がい福祉課長、川村主査

その他：コルクえべつ事務局明石コーディネーター、高橋サブコーディネーター

傍聴者：1名

会議概要

1 開会

会長の欠席により、会長代理が進行することを確認

2 議事

- (1) 江別市生涯活躍のまち推進事業 令和6年度取組経過報告
資料1に基づき事務局から説明
【質疑なし】

- (2) 江別市生涯活躍のまち推進事業 令和7年度取組予定
資料2に基づき事務局から説明
【質疑】

○田原委員

令和7年度予算について、令和6年度から43万円減額となっているが、その多くが地域再生協議会運営費という理解でよいか。

○事務局

令和6年度と比較して令和7年度は43万円減額となっているが、地域再生協議会が今年度をもって終了することから、その運営経費が減額分の大部

分を占めている。

○田原委員

先ほどの説明では、3月に予算が決定するということだが、議論の中で予算が更に必要となった場合は上乘せされることがあるのか。

○事務局

資料に示している金額は、あくまでも案であり内示金額となる。予算については、コーディネーターと市が新年度の地域交流事業の取組などについて協議を重ね、事業の実施に必要な経費を要求したものである。正式な予算額は、市議会の議決をもって決定され、その予算の中で令和7年度の取組みを進めていくことになる。

○萩原会長代理

ほかにあるか。

○森田委員

ビアガーデンとキッチンカーフェスは、令和7年度も実施する予定はあるのか。また、現在のコーディネーターの人数と人件費について確認したい。

○事務局

ココルクえべつには、常勤のコーディネーターが2名、外部コーディネーターが3名の合わせて5名がいる。コーディネーターの人件費については、資料2に示した①地域交流事業等653万8千円の中に、外部コーディネーターの人件費全額と常勤コーディネーターの人件費の一部が含まれている。

○ココルクえべつ事務局

コロナ明けの現在も、施設では面会等の制限があるが、ビアガーデンは令和5年度から実施しており、入所者だけでなくその家族にも楽しんでいただき、地域交流という面でも大切な事業と認識している。令和7年度は、事業全体の中で調整しており、現時点で断言はできないが、キッチンカーフェスは実施する方向で検討している。なお、キッチンカーについては、大きなものだけでなく、日常的に施設を訪れた方に利用していただけるような工夫をしながら、継続して取り組んでいる。

○森田委員

この二つの事業についても継続して実施していただきたい。コーディネーターの人件費については、全額ではないものの、人件費の一部が委託料に含まれているということで理解した。

○萩原会長代理

ほかにあるか。

○岸本委員

障がい者グループホームには、現在、何名が入所しているのか。

○ココルクえべつ事務局

定員数と同じ20名である。

○岸本委員

構想策定時に、うどん屋やパン屋のほか、パン屋に喫茶コーナーを設け、そこで障がい者の就労も考えているという話があったが、現在はどのような状況か。

○ココルクえべつ事務局

現在、5名がうどん屋やパン屋で働いているが、20名いるグループホーム入所者の中には障がい者の通所施設に通っている方など、一般の就労が難しい者もいる。委員指摘の喫茶コーナーについては、施設がオープンしてから実際運営してきた中で、現在働いている方の負担がこれ以上増えるのは難しいと感じており、現状を踏まえて、現在のパン屋のイートインコーナーを違う方向で活用できないか検討している。

○岸本委員

個々に合った形での就労については理解しており、可能性があればということを確認した。

(3) 江別市生涯活躍のまち整備事業地域再生協議会の解散及び新たな協議機関の概要について

資料3に基づき事務局、明石コーディネーター及び谷田川委員から説明

【質疑】

○藤本委員

新たな協議機関の設置者は、江別市ではなく日本介護事業団となり、日本介護事業団が事務局を兼ねて進めていくという理解でよいか。

○ココルクえべつ事務局

日本介護事業団で事務局を持ち、運営することになる。

○藤本委員

承知した。

次に、新たな協議機関の名称が仮称で示されているが、文字どおり、ココルクえべつを推進するための協議会となり違和感がある。例として、ココル

クえべつ運営推進協議会や連絡推進協議会など、ココルクえべつの何を推進するための協議会なのか明確になる名称を今後検討いただきたい。

○ココルクえべつ事務局

資料には仮称で示しているが、現在、日本介護事業団でも、ココルクえべつ運営協議会という名称も候補の一つとして協議している。今後のスケジュールでも説明したように、5月に予定している協議会設置の正式決定に向け、委員の意見も参考に協議させていただく。

○萩原会長代理

ほかにあるか。

○岸本委員

新しい協議会について、令和7年度は市で予算措置がされているが、その後も、補助なのか委託かはわからないが、設置期間としている日本介護事業団と市の協定期間は、市の予算措置がされるという理解でよいか。

○事務局

現在は、市からの委託という形で事業を進めている。今回、地域再生法に基づく協議会にいったん区切りをつけるが、今後も、新たな協議機関を設置し事業を進めていくことに変わりはない。予算についても、委託と補助のどちらがよいか議論はあるが、生涯活躍のまち構想自体が終わったわけではなく、市と事業者が締結している20年間の事業協定に基づき、地域再生推進法人とのパートナーシップの中で、法人と協議しながら事業の推進に必要な予算を市として確保していく形になると考えている。

○岸本委員

ココルクえべつで実施したイベントに多くの方に参加していただいているが、施設までのバス路線が非常に少ないため、現状は、車で来るか近くに住んでいる方が徒歩で参加するケースが多いと思う。

昨今は、バス路線の廃止や減便など難しい状況であることは理解しているが、江別版生涯活躍のまち構想を掲げ、今まで以上の広がりを目指して進めていくのであれば、UR団地や野幌地区などからの参加も視野に入れた移動手段の確保の必要性について、これまでも何度か申し上げてきた。運転免許証を返納する高齢者も非常に多くなっており、冬季の道が悪い中で小さな子どもを連れて親子で参加することは難しいと思うので、移動手段の確保については考えていただきたい。

○事務局

移動手段の確保については、要望として受け止めさせていただく。

○萩原会長代理

ほかにあるか。(なし)

それでは、事務局の説明のとおり、本協議会の役割である、江別版「生涯活躍のまち」構想実現のために定めた形成事業計画の進捗管理等を終えたことから、今任期をもって本協議会を解散することとし、今後、その後継となる新たな協議機関をココルクえべつ内に設置することについて、この場で確認してよろしいか。(了)

3 その他

○萩原会長代理

本日の協議会が最後となることから、各委員から一言ご挨拶をいただきたいと思うが、よろしいか。(了)

○谷田川委員(社会福祉法人日本介護事業団)

新たな協議機関に関する各委員の意見などを参考に、名称を含め検討させていただく。今後ともよろしくお願ひしたい。

○菊地委員(北翔大学・北翔大学短期大学部)

委員として途中から参加させていただいた。協議会として違う形となるが、これまでのココルクえべつの取組については、今後も継続していただきたい。

○新田委員(札幌学院大学)

ココルクえべつの立上げの時期からかわり、私自身も大変勉強させていただいた。いろいろな出来事が思い出され、本協議会の解散についても感慨深いものがある。これまで様々な問題があったが、取組を続ける中で時間を経て定着してきたと感じている。私としては、ココルクえべつのサービス付き高齢者住宅の入居者の中にも、まだまだ元気で地域に貢献したいと考えている方がいると思っており、そういう方たちに市民公募委員になっていただくなど、ココルクえべつに暮らす高齢者や障がいのある方が当事者としてかわる仕組みができれば、今後、違うフェーズに入っていけると思っている。

○藤本委員(北海道情報大学)

私も、初期メンバーとして当初からかわらせていただき、私自身も勉強になった。この間、コロナ禍もあったが、関係者の皆様のご尽力により素晴らしい施設と事業になったと感じている。

先ほど、岸本委員から交通アクセスの問題について指摘があったが、このことはワークショップの段階から課題として認識されていた。ただ、専門家の立場から一言申し上げると、ココルクえべつ単体で移動手段の確保を充実させるのはかなりハードルが高いと感じている。市には、公共交通に関する協議会があるが、公共交通を絡め、福祉や観光目的のほかデマンドバスなど多様な交通手段への要望がある中で、ココルクえべつのニーズを市として情報共有していただき、特に冬季など車を持たない学生も気軽に参加できるよう検討するなど、少しずつ交通アクセスを充実することができれば、より発展し魅力ある施設、事業になると期待している。

○小林委員（江別市自治会連絡協議会）

私も初期の段階からかかわらせていただいた。現在の施設や事業の状況を見ると、非常に思い出深い取組であったと感じている。自治会の話を上げると、最近では、サービス付き高齢者住宅の入居者で組織する自治会が新たに設立され、当初は様々な問題もあったが、新しい自治会として将来的にも様々な活動を考えていると聞いている。また、ココルクえべつの取組についても、今後どのような方向性に進んでいくのか非常に楽しみにしている。今後も、何らかの形で引き続きお役に立てればと思っている。

○田原委員（江別市社会福祉協議会）

私も初期の段階からかかわらせていただいた。当初は、これだけ大きな施設、事業になるとは考えておらず、地域住民や学校など地域の方たちを巻き込みながら事業がここまで広がってきたことに驚いている。一方で、江別地区に住んでいる方たちには、ココルクえべつの認知度はそれほど高くなく、施設に来ること自体が非常に難しいため、交流事業にも参加していないのが現状だと思う。今後、江別地区にも、これほど大きくなくてもいいが同じような施設ができ、更に事業が広がり充実することを願っている。

○森田委員（江別市生涯学習推進協議会）

パン屋や温泉などもよく利用しており、個人としてもNPO法人として地域の居場所づくりなどに取り組んでいるため、ココルクえべつで実施している様々な事業がとても参考になった。今後、新たな協議体が設置されるということだが、引き続き、何かお手伝いできればと思っている。

○岸本委員（江別市商店街振興組合連合会）

地元の商店街を代表し、私も当初からかかわらせていただいた。生涯活躍

のまち構想ということで、事業の推進には、当初から人材と財政的な面が問題であると申し上げてきた。これまでの取組を見ると、コーディネーターを中心に努力された結果が形になっていると感じている。

もう一つの課題である財政面については、率直に申し上げますと、市としてどこまで絡んでどこまで支援するのかということである。財政的な担保がなければ、事業の継続は難しく、現在も700万円近い予算で事業を進めていることを考えると、もっと広がりのある取組ができるのではという思いがある。今後、市としても様々な課題を解決しながら、しっかりバックアップしていただき、私も地元として盛り上げていきたい。

○佐々木委員（北洋銀行江別中央支店）

私も委員として途中から参加させていただき、あまり貢献できなかったという思いがある。今後、協議会の主体が変わっても事業としては継続されるということだが、要望として、最近、移住という言葉をよく聞くが、今後も増加が見込まれる道外から北海道に移住する方に江別が選ばれるよう、魅力的なまちづくりを目指し、引き続き活動していただきたい。

○坂本委員（北海道銀行野幌支店）

私も昨年より委員となり、当初の皆さんのご苦勞は理解できていない部分があると思うが、昨今、SNSが主流の中で、人とのつながりをテーマに様々な事業に取り組んでいることはとても勉強になり、これからも継続していただきたい。今後も、地元の金融機関として貢献していきたい思いがあるので、何かあればご相談いただきたい。

○赤川委員（市民公募委員）

私は市民委員として参加させていただいた。当時を思い返すと、札幌盲学校の閉校にはとても衝撃を受けたが、ココルクえべつができることを知りとても楽しみにしていた。これまでの個人的なココルクえべつとのかかわりでいろいろな方から話を聞き感じたことは、施設の利用者や入居者が直接交流事業に参加することも一つの交流の形であるが、車椅子を利用している方や一日中ベッドにいる方など様々な方がいる中で、そういう方たちがその場の雰囲気に触れて、ニコッと笑顔になれば更に素晴らしいと思っている。

これまでの様々な事業の実施に対し評価しているが、今後、ただ同じことを続けるだけでは事業の継続が難しくなると感じており、継続するためには少しずつ変化をさせていかなければならない。現在、大学生がボランティアなどで参加しているが、事業に参加している子どもたちもいずれ大きくなる

ので、そういう子どもたちに企画段階からかかわっていただき、そこから出てくるアイデアを参考にしながら少し長いスパンで取り組み、更に発展していただければと思う。

○萩原会長代理（酪農学園大学）

私も途中から参加させていただいたが、これまで関係者の尽力でこのような立派な施設ができ、事業が進められていることに非常に感動している。生涯活躍のまちという大きなテーマのもとで運営していくことを考えると、委員からも指摘があったが、サステイナブル、すなわち永遠とつながる仕組みづくりが次期の課題と感じている。私のほかにも大学から参加している委員がいるが、江別市は大学生が多く、この若者のパワーとエネルギーをもう少し活用し、コミュニケーションを取りながら動かさなければいけないという思いがある。ただ、現状では、ココルクえべつを知らない学生が多く、大麻地区に住んでいる学生がココルクえべつを知らず、活用していないことは問題であり、今後、何か仕掛けていく必要があると感じている。私も酪農学園大学ということで、食と健康に関してアピールできるものがあれば参加させていただきたいし、同時に、大学にも気軽に遊びに来ていただけるような地域に開かれた大学としての雰囲気づくりも進めていきたい。これからの課題として共に考えながら進めていきたいと考えているので、よろしく願いしたい。

事務局から何かないか。

○事務局（企画政策部次長）

本協議会が今回で区切りを迎えることから、市として一言ご挨拶を申し上げます。令和元年6月の第1回協議会開催から足かけ6年の間、委員の皆様には大変お世話になり感謝申し上げます。令和3年にココルクえべつがオープンし、日本介護事業団と試行錯誤しながら地域交流事業などを進めてきたが、施設には、現在、毎年10万人を超える来場者がある。今回をもって本協議会自体は終了となるが、生涯活躍のまち構想の考え方を普及させるため、今後も共生のまちづくりに向けて、皆様方と連携しながら進めていきたい。引き続きよろしく願いしたい。

4 閉会

以上